みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Coiled Basketry Technique in Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 俊亀智 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004555

国立民族学博物館所蔵の巻きカゴ細工，とくに国内資料について

中　村　俊　亀　智*

Coiled Basketry Technique in Japan

Shunkichi NAKAMURA

In Japan the coiled basketry technique has developed one of the main techniques for rice-straw basketry (*makiwara-zaiku*). Two variations of this technique, called here Type A and B, are described in this paper. Coiled basketry consists of two elements, the warp, or foundation, and the weft. The two variations fasten the foundation in slightly different ways:

A: the foundation is held together continuously by a single weft (Fig. 1 a, d, f), and,

B: the weft is cut at each stitch (Fig. 1 b, c).

Ⅰ．分析方法
Ⅱ．標本資料の分析例
Ⅲ．若干の考察

Ⅰ．分析方法

巻きカゴ細工は，竹，ワラ，木の小枝，つる（蔓）などをカゴの形に渦巻形に巻きあげる手法で，その分布はいたってひろく，組みカゴ細工とともにカゴ細工を二分する主要な手法として知られている[1)]。

* 国立民族学博物館第4研究部

1) たとえば「カゴ細工には2つの主要なタイプがある。巻きあげ手法 coilling (sowing) と組み（織り）あげ手法 weaving がそれである。両手法はひろく分布していて，多くの民族はたいていその両方の技術をもっている。巻きカゴ細工は地中海，アフリカ，東アジア，インドネシア，オーストラリア，南北アメリカの各地域に分布し，weaving の手法は同じように南北アメリカ，アジア，東部インド，アフリカ各地に分布している」[BEALS, HOIJER 1965: 355]。なお，巻きあげ手法の用具にはタテをヨコにとおすための縫い針などがつかわれる。国内資料について今回はそうした点を確めることができなかったので，ここでは用具には触れない。

この手法は，日本の竹カゴ細工にはほとんどみあたらず，かえってワラ細工のなかにその痕跡がのこされているのではないかと考えられている［中村　1966, 1970: 166–167］。しかし，巻きカゴ細工の手法上の型や国外資料との異同については詳しくつきつめられていなかったといってよい。

この報告は，それらの点を明らかにするため，国立民族学博物館所蔵の標本資料の分析によって，国内の巻きカゴ細工を手法的に区分するとともに，あわせて国外の巻きカゴ細工との異同をたしかめようとしたものである。

分析にはつぎの点に注意した。

1　一般にカゴの編み方は全体の大きさや部材の寸法・材質などと関係することが予想されるので，まず，国内の標本資料のおのおのについて全体の大きさを計り，比例関係をみ，部材の寸法（幅，厚さ）などを調べ，その後，編み方をたしかめた。

2　編み方を確めるため，その様子を用語であらわし，また一定のやり方にしたがって図にかいて確認することにした。

3　用語については，ここではとりあえず，つぎのように考えた。

巻きカゴ細工は2つの要素から成りたつ（成りたつものと考えよう）。

この2つの要素を仮りにタテ・ヨコということにしよう。

ヨコは巻きカゴ細工のカゴを置いたとき，左右の方向にむいている要素，タテはヨコに螺旋形に巻きつけることによってヨコを上下方向に接合する要素といえる。そこで，巻きカゴ細工をやや一般化していいかえれば，

巻きカゴ細工は，ヨコにタテを螺旋形に巻きつけ，それによってヨコ同志を結合する手法

ということができる。とすれば，タテでヨコを巻いてゆくとき，何本ヨコにかけてゆくかによって（何段ヨコにかけてゆくかによって），編み方をわけることができよう。たとえば，

1段だけに巻きつけたものを1段巻きという。

2段だけに巻きつけるものを2段巻きという。

3段だけに巻きつけるものを3段巻という。

このほか実際には，1段半巻きといったらよいのか，または2段巻きの変形とみたらよいのか，タテでヨコ2段を巻きこんでゆくとき，下の段のヨコを無傷のままとりこむのではなしに，下の段の上の部分に，ちょうど針で糸をとおすように，ヨコのなかにタテをとおして表から裏へ（裏から表へ）もってゆくやり方がある。ここではこれを，とりありえず，

2段とおしかがり

といっておく。

もともと，これらの分析用語は，巻きカゴ細工の製作の実際に即して概念化されることが望ましいが，ここでは分析の目的をひとまず満たすため，このような言い方をしておこう。

4　また，編み方の図は次の約束にしたがった。ヨコは柱形，タテは実線で示し，編み目をやや斜めからみた状態をあらわすようにした。ヨコは図のように実際には太くないし，ヨコとヨコのあいだには図のような透間はないけれども，タテの様子をよりよくあらわすために，このような分解図をつくってみた。図はすべて巻きカゴ細工の表側から眺めた有様を写すことにし，みえない部分は点線で示した。

5　以上と同じことを，ここでは国外の標本資料についてもおこない，若干の比較をおこなった。ただし北アメリカ地域の巻きカゴ細工については，すでに詳細な報告もあり，ややかけはなれているので，ここではとりあげなかった[2)]。

なお採集地の地名が収蔵原簿に記載されていない場合には「採集地は明らかではない」といった言い方をした。しかしこれは，その昔資料を扱った人たちが厳密さを要求するあまり，たとえば県のみわかっていて市町村の名が不明の場合には採集地の項を空欄のまま将来の確認にまかせたというようなことがあり，それだからといって資料をまったく無価値にしてしまうものではない。

Ⅱ．標本資料の分析例

以下ここでは所蔵の巻きカゴ細工（40点余）のうち，その編み方を示すよい例として16点をとりあげた。その配列は前記の手法上の区分にしたがい，2段とおしかがり，2段巻き，1段巻きの順とし，それらの国内資料と対比するために例13・14・15・16

2) 北アメリカ地域では，巻きカゴ細工はおよそ4つの分布領域をもっている [Driver 1961: 160–161]。極北地帯，亜極北地域の南半分からユーコン亜極北地域の西の一部，グレート・ベースンや平原文化地域の西を含む西部の地方，五大湖周辺などにみられる飛地的な存在がそれである。なかでもカリフォルニア南部において巻きカゴ細工は容器の主要なタイプとしてもっとも発展したことが知られている。これらのカゴ細工については詳細な報告に接することができる [Barrett 1908] [Kerry 1930] [O'neale 1932]。カゴ細工にはこのほか双子編 (twining) によるものや市松 (checker) アジロ (twill) があるが，双子編のカゴは北西海岸にせまい帯状の分布領域をもつほか，グレート・ベイスンや平原地域では巻きカゴ細工とかさなりあい，また，市松やアジロはそれらとは対照的に，東部の各地やメキシコでは支配的であるという [Driver 1961: 161]。北アメリカの極北地帯にみる巻きカゴの技術は北海道やサハリンの巻きカゴ細工と結びつくらしく，ただしそれとより南の巻きカゴ細工とがどのようにつながりあうかは目下のところ明らかではない。巻きカゴ細工にはいくつかの層があり，よりひろい視野にたって巻きカゴの技術全体を分類しなおす必要があろう。

を，さらにのちの考察のための参考例として，巻きカゴ細工ではないけれども例17をあげてみた。

例1　〔呼び名〕ガイスバル　〔標本番号〕17673　〔収蔵原簿番号〕5880（2収—1F—11—3）

1935年，沖縄県八重山郡竹富村黒島で早川孝太郎氏によって採集されたもので，そ

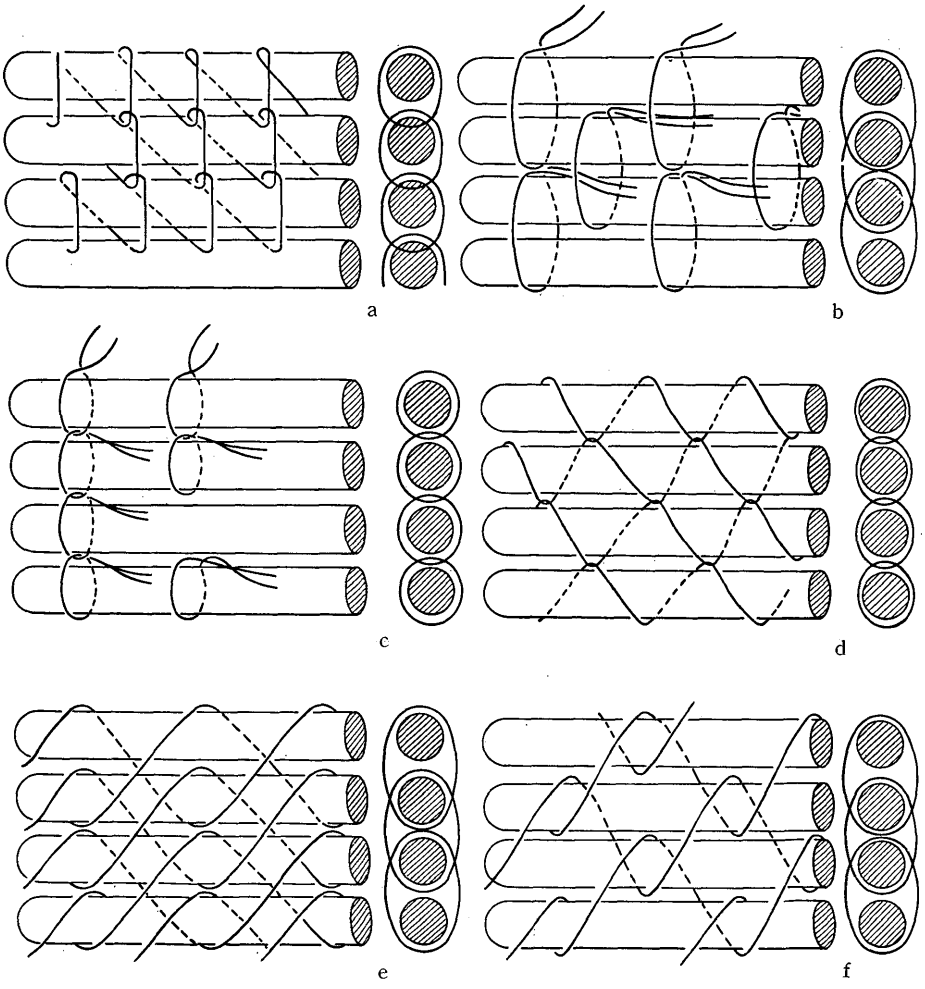


図1　巻きカゴ細工のタテ配り

a　例6　フゴ　島根，大社町（2段とおしかがり）
b　例11　イジコ　（2段巻き）
c　例12　円形敷物　（1段巻き）
d　例13　容器　台湾　（1段巻き）
e　例14　食具　台湾　（2段巻き）
f　例16　草編皿　マレーシア（2段巻き）

の付票には用途は穀物いれ，材料はトウザルモドキとある。また，当時はこれがどこの家にも四つも五つも積んであったものだという。全体の形は直径 51 cm，口径 48.5 cm，底径 39.5 cm，高さ 23 cm の胴に張りのある円筒形で，ヨコは底部で16段，胴の部分で21段となっている。その形は量感にとみ，巻きカゴ細工の標本のなかでも，とりわけすぐれた標本ということができる。ヨコは太さ 1 cm，タテは幅 5 mm 前後で，タテのかけ方は，タテでヨコを編んでゆくとき，すでに巻いたヨコの上部にタテをとおしながら巻いてゆく 2 段とおしかがりとなっている。タテの間隔は 1 cm ほどで，なおこの器には，底の縁に太さ 1 cm のヨコが台輪のかわりに取りつけられている。縁仕上げは，他のこの地方の巻きカゴ細工の場合と同じように，タテでヨコを巻くとき，タテを下段のヨコの上部にとおし，その隣りは 3 回つづけてヨコへとおさずに最上段のヨコだけを束ね，またその次は下段のヨコの上部にとおすという過程を繰り返してゆく。タテの幅が器全体の大きさに比べてせまく，その間隔もせまいため編み目の密度がたかく，いかにも手がたさが感じられる。

例2　〔呼び名〕ガイシナア　〔標本番号〕17002　〔収蔵原簿番号〕5147（2収—1E—20—2）

直径約 30 cm，高さ 13.5 cm の円筒形の蓋つき容器で，1935年，岩崎卓爾氏によって採集されたものである（所用地は沖縄県とのみあって詳しくは明らかでない）。本体は高さ 13.5 cm，口径 29 cm，蓋は高さ 4 cm，直径 29 cm で，落し蓋の形式となっている。この器形は八重山諸島のほか台湾に共通に見出される。ヨコは太さ 6 mm で，底部では19段，胴の部分は17段，底の中心部と底から胴に移行する部分ではそれよりもやや細く，また，縁の部分ではそれよりもやや太く束ねられている。この容器では，タテをある段のヨコにかけ，その下の段のヨコの上の部分をとおして反対側にだし，タテでヨコを編んでゆく 2 段とおしかがりの方式がとられている。ある段のタテとその上下のタテとは左上りの坂道形に接している。

例3　〔呼び名〕メシビツ　〔標本番号〕16399　〔収蔵原簿番号〕3531（2収—1E—7—4）

1933年 9 月永井龍一氏によって鹿児島県十島村竹島から採集された総高 17 cm，直径 27 cm の蓋つき円筒形の巻きカゴ細工で，本体は直径 23 cm，高さ 16.5 cm，蓋は直径 27 cm，高さ 4.5 cm。ヨコは太さ 5 mm で比較的細く，タテは竹で，幅 2.5 mm のものをおよそ 5 mm の間隔で巻いている。縁の仕上げは特別丁寧で，全体として編み目の密度がきわめてたかいのも特徴のひとつで，そこには手がたい仕事ぶりがうかがえる。タテのかけ方は 2 段とおしかがりで，タテの外観は右上りの坂道形である。

タテをヨコにかけるとき，すでに編みおえた下の段のヨコの上端にさしとおして，結局，2段ずつ巻いてゆく（あるいは1段半ずつといってもよい）。蓋の編み方もこれとまったく同様で，ただその中心はくぼんでいる。

例4　〔呼び名〕シンタ？　〔標本番号〕16599〔収蔵原簿番号〕4133（2収—1E—11—4）

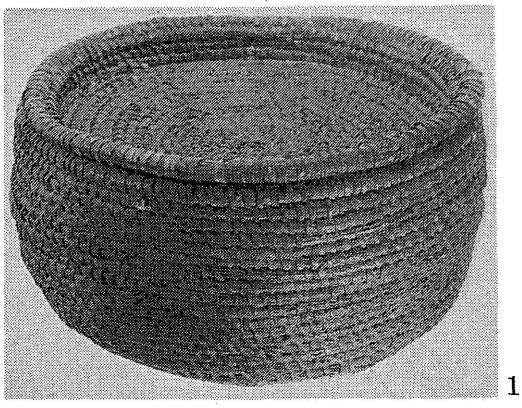
1934年頃 AM（アチック・ミューゼアム）同人によって鹿児島県十島村硫黄島で採集されたものという。直径 41.5 cm，高さ約 13 cm の半球体形の蓋で，この種の標本のうちではもっとも大形のもののひとつである。ヨコは太さ 1 cm ほどで約30段に巻きあげられている。その頂の部分では口辺部よりヨコの太さがやや細くなっていて，そこに幅 1 mm の皮竹で編んだ長さ 12 cm のつまみがある。タテは幅 5 mm の皮竹で，新しいヨコをかけるとき古いヨコの上部にタテをとおして巻きあげてゆく2段とおしかがりの手法が用いられている。タテは右上りの坂道形である。縁仕上げの過程では，タテをヨコにとおし，その次は通さずにヨコをひとまきし，次はまたとおすという操作を繰返す。このような縁仕上げの方法は他の資料についても同じであるが，この標本ではその有様がはっきりと確められる。

例5　〔呼び名〕ジョウゴ　〔標本番号〕18228〔収蔵原簿番号〕6491（2収—1F—3—1）

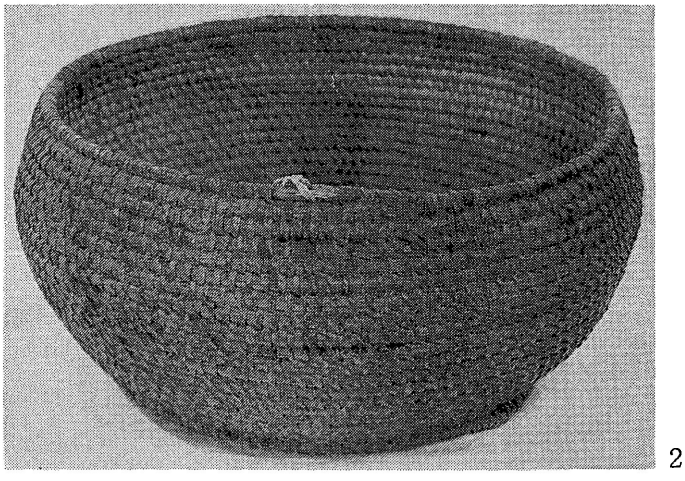
口の直径 39 cm，高さ 27 cm，底の直径 21 cm のジョウゴで，1935年頃，高橋哲雄氏によって山口県熊毛郡上関村で採集されたものという。この巻きあげ細工でとくに注意をひくのは，タテに太さ 3 mm ほどのシュロの縄がつかわれていることである。ヨコは太さ 15 mm で，タテは下段のヨコにとおし，上段のヨコごとに巻いてゆく2段とおしかがりのやり方がまもられている。その際，タテの間隔は約 2 cm で，上下段のタテが作りあげる文様は左上りの坂道形となっている。縁仕上げは，それまでのタテのかけ方と同じように，タテを1段下のヨコの上部にとおし，そのやり方でひとまず巻きおえたあと，今度は最上段のヨコだけにタテをとおしてゆくやり方で，すでにかけていたタテのあいだに加えてゆく。これはカゴ細工の2度巻きのやり方に似ている。

例6　〔呼び名〕フゴ　〔収蔵原簿番号〕3561（2収—1M—5—2）

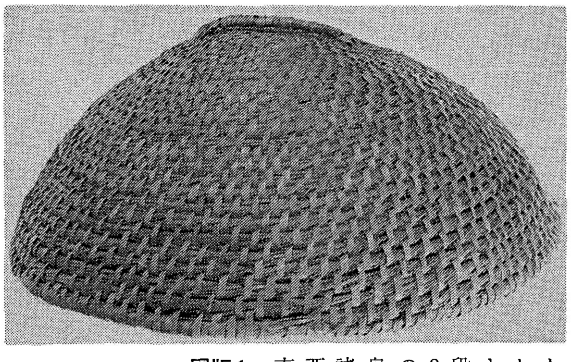
1933年12月，澁澤敬三氏によって島根県簸川郡大社町で採集されたものという。総高 30 cm，直径 43 cm の蓋付きの円筒体形の巻きワラ細工の器で，その大きさからいって，炊きあがった御飯をさめないようにいれておく飯櫃いれと思われる。本体は高さ 27 cm，直径 39 cm，蓋は高さ 7 cm，直径 43 cm で，本体も蓋もヨコは太さ 25 mm，



1



2

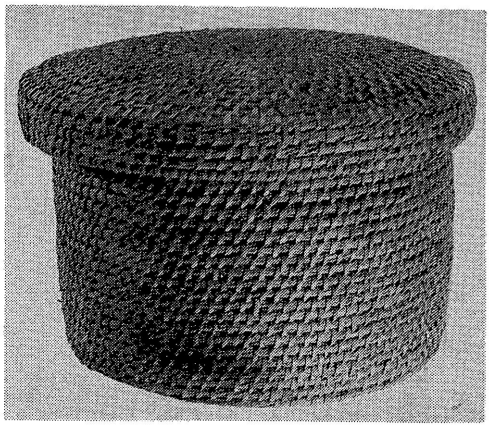


3

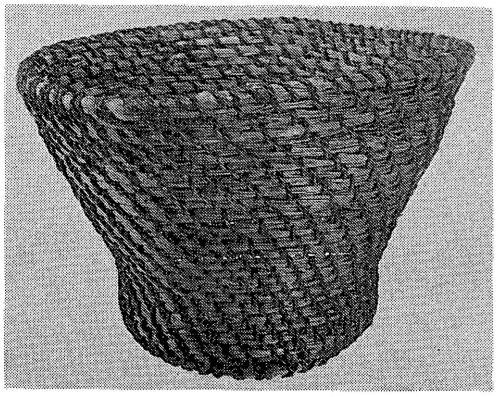
図版1　南西諸島の2段とおしかがり

1　ガイシナー（沖縄県，高さ13 cm）2段とおしかがり〔例2〕(5147)
2　ガイスバル（沖縄県八重山郡竹富島，高さ 22.5 cm）2段とおしかがり〔例1〕(5880)
3　シンタ（鹿児島県大島郡硫黄島，高さ 16 cm）2段とおしかがり〔例4〕(4133)

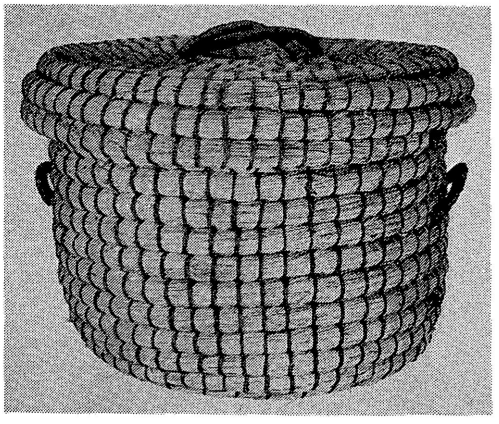
最後のカッコのなかの数字は収蔵原簿の番号を示す。(以下同じ。)



4



5



6

図版2　2段とおしかがりのバリエーション

4　メシビツ（鹿児島県大島郡十島村竹島，高さ14cm）　2段とおしかがり〔例3〕(3531)
5　ジョウゴ（山口県熊毛郡上関村，高さ24.5cm）　2段とおしかがり〔例5〕(6491)
6　フゴ（島根県簸川郡大社町，高さ29cm）　2段とおしかがり〔例6〕(3561)

タテは太さ 2.5 mm で，ヨコはワラを束ねたもの，全体はそれをタテのシュロ縄で約 2 cm ごとに巻いたもので，ヨコは底で 6 段，胴の部分で11段となっている。この器できわめて特徴的なのは，胴の外側では，各段のタテが上下方向に一線につらなるよう縄配りがなされていることである。それがまたこの器の文様となっている。いま，ある段のタテの掛け方を調べてみると，内側であるヨコの下端に出たタテは，内側を下から上へとのぼりヨコの上端から器の外側にまわり，そこで垂直にさがり，いままわってきたヨコのひとつ下のヨコの上の部分を抜けて再び内側から外側への過程をくりかえしてゆくことがわかる。こうして，タテの文様は器の外面では上下一直線にならんでいるが，器の内側では右上りの平行な斜線の集合となって現われる。手法的には 2 段とおしかがりとなっている。この標本には本体の両側と蓋のまんなかに太さ 1cm, 長さ 13 cm のシュロの手がとりつけられている。

例 7　〔呼び名〕スオンキ　〔標本番号〕18713　〔収蔵原簿番号〕7069（2 収—1G—5—5）

1936年頃，北海道胆振国幌別郡幌別で知里真志保氏によって採集された最大幅 14 cm, 高さ 15.5 cm の蓋付きの物いれで，やはり巻上げ細工の手法によってつくられている。この標本ではヨコは太さ約 1 cm, タテは太さ 1 mm で，タテは丈夫な紐で，この紐でヨコをかがってゆくとき，この器でもまた，すでに積み上げられているヨコの上部に紐をとおし，新たに積みあげるヨコをそれといっしょに束ねる 2 段とおしかがりの方法が用いられている。底部の中心部のヨコはやや細く，底は 7 段，胴は18段で，タテの上下関係は外からみて左上りの坂道形となっている。こうした編み方が自ずからなされたものなのか，または他の同系の器物の編み方から影響をうけた結果なのかは確められていないが，とにかくこの資料はこの手法が北海道にもおこなわれていたかもしれないことを示している。ただし，この種の容器は収蔵の標本資料では 1 例のみであり，他の資料にもそれほど一般的にはみられないので，さらに詳しく調べてみなければならない。北海道から北にのぼると，そこでは別種の巻きカゴ細工に出会うが，そうした巻きカゴ細工とこのスオンキの編み方とがどう係りあってきたかもひとまず問題になろう。なお，ヨコの材料はヨシかガマの葉ではないかと思われる。

例 8　〔呼び名〕五合炊きのナベフタ　〔標本番号〕16998　〔収蔵原簿番号〕5139（2 収—1E—20—2）

直径 28.5 cm, 高さ約 10 cm の円錐形のワラの鍋蓋で，これも岩崎卓爾氏によって1935年に沖縄県下で採集されたものである。その頂きには三つ平組のつまみが取りつけられている。ヨコは太さ約 1 cm, タテは幅 5 mm 前後で，ヨコは12段に巻きあげら

れている。タテのヨコへのかけ方は2段巻きで，ヨコ2段ずつひとまきするごとに，その両端をひねっていっしょにし，その後ヨコの方向に倒し，隣りのタテをかけるとき，ヨコといっしょにおさえるようにしてとめる。こうした編み方は後に述べるように東北地方のイズメの編み方と基本的に共通で，ただし，この器ではタテの末端のねじり目がイズメのように器の内側にみられるのではなく，無雑作に器の外側に出ている点，タテの幅が狭いことなどが異なる。タテは右上りの坂道形をていしている。

例9　〔呼び名〕シンニィ　〔標本番号〕18902　〔収蔵原簿番号〕7289（2収—1G—8—2）

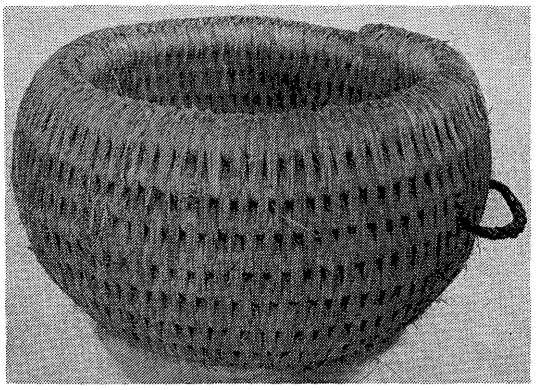
鹿児島県大島郡喜界町で岩倉市郎氏によって採集されたもので，記録によればシナイ（背負籠）を背負うときに腰にあてるものとある。直径34 cm，厚さ17 mmの円板形の巻きワラ細工で，中心には直径3 cmの穴がある。ヨコは約1 cmの太さ，タテは幅約7 mmで，編み方はタテでヨコを1ないし4 cmの間をおいて2段ずつ巻いてゆくもので，タテはひと巻きするごとに，その両端をねじりあわせ，その先端を次のタテでヨコに束ねこむ方法がなされている。この方法は東北地方のイズメの典型的な編み方と基本的に一致するもので，南西諸島のこのような手法が本で東北地方のそれが末なのか，またその逆に東北地方をはじめ本州各地のものが本でそれが南西諸島に影響を与えたのか，またはタテにワラのような素材をつかえばこうなりやすいのか，その点はまだ明らかではない。

例10　〔品名〕（ワラ蓋）〔収蔵原簿番号〕50015（2収—1M—5—2）

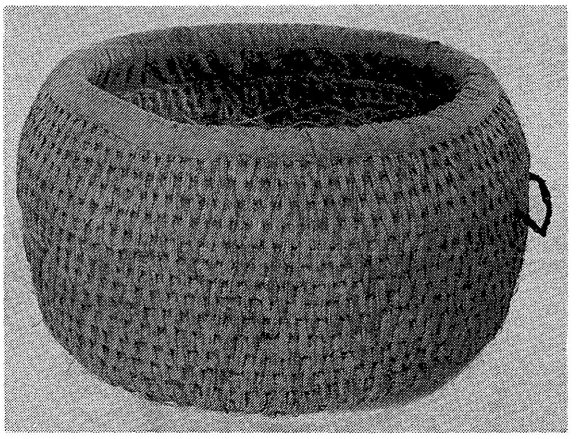
直径36 cm，高さ約26 cmの半球体形の蓋で，材料はワラである。使用地は収蔵原簿にはみえないが九州・南西諸島のものかと思われる。ヨコは太さ15 mm，タテは幅5 mm内外で，タテの間隔は3 cmとなっている。なお，縁の部分は，最後の段のヨコを構成するワラを3つにわけ，それを平三つ組に編み，あたかも，組紐でもとりつけたような形式に仕上げている。タテでヨコ2段ずついっしょに巻き，1巻きするごとにその両端をよりあわせてとめてゆく。ただし，イズメなどの編み方と異なり，タテとタテとの間隔が広くあいていて，タテの配置を外からみると，ちょうど左上りの坂道形となっている。この例ではタテの幅もせまく，器形もそれほど大きくないが，この2段巻きでひとまきするごとにその端を結んでとめる手法が，やがて大形の巻きワラ細工にまで用いられるようになる。

例11　〔名称〕嬰児籠　〔収蔵原簿番号〕11807（2収—11—8—5）

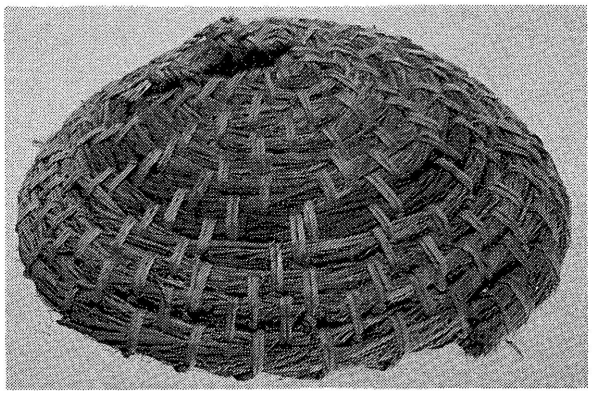
口の直径（ただし外側から外側まで）64 cm，高さ35 cm，底径50 cmの半球体形の巻きワラ細工で，所用地は記録にみえないが，そこには東北地方でつかわれていた



7



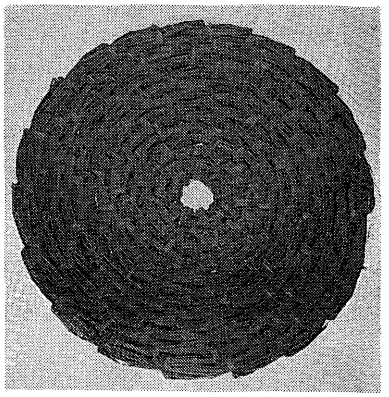
8



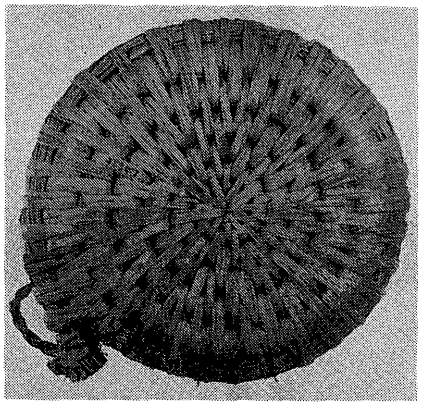
9

図版3　2　段　巻　き

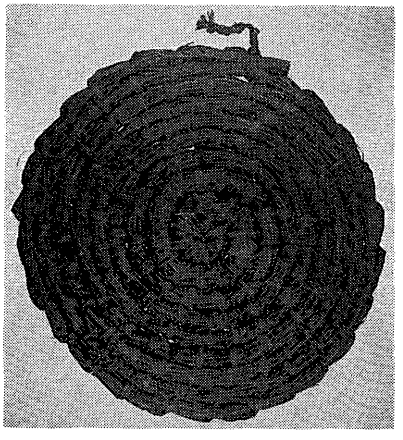
7　いじこ（所用地は明らかでない，高さ 37 cm）　2段巻き　〔例11〕(11807)
8　いじこ（新潟県北魚沼郡湯之谷村，高さ 31 cm）　2段巻き　〔参考例として〕(6327)
9　ナベフタ（沖縄，高さ 29 cm）　2段巻き　〔例8〕(5139)



10



11



12

図版4　円形の巻きワラ細工

10　シンニイ（鹿児島県大島郡喜界，直径 34 cm）　2段巻き〔例9〕7289
11　鍋しき（所用地は明らかでない（直径 28.5 cm）　2段巻き〔参考例として〕(22327)
12　敷物（所用地は明らかでない，直径 38 cm）　1段巻き〔例12〕(11608)

イズメの典型的な手法をみることができる。その様子から編み方を推しはかると，まずはじめにワラを 1.5 cm ほどの太さに束ね，差渡し 4 cm ほどの輪をつくり，それを時計の針の進み方とは逆の方向に渦巻形に巻いてゆき，そのあいだにワラを加えて次第に太さを増し，3巻きしたところで太さ 3.5 cm ほどにし，あとは同じ太さで胴の部分までつくりあげる。ヨコの巻き数は底部で8段，胴の部分は約7段である。そのヨコを結合するのはタテのワラの帯で，その幅は 1.5 cm 前後，ここでは1本の帯で上下2段のヨコを束ねてゆき，その端はヨコとヨコとのあいだにはさまれて外側からみることができないが，帯の両端は結びあわせてひとまとめにし，下段のヨコの上に重ね，次のタテをかけるときいっしょに巻いてしまう。あるタテとその上下の段を束ねている隣りのタテとは接していて，タテで器全体がおおわれるようになる。東北地方のイズメではヨコを2段ずつ巻いてゆくタテの行列がカスリのような文様を形作り，それがそのまま器の装飾としての効果を生む。こうしてこの器の編み方には2段巻き，タテを1巻きごとに結びとめる手法がなされている。

例12〔収蔵原簿番号〕11608（2収—11—7—1）

長径 38.5 cm，短径 37.5 cm，厚さ 2 cm の巻きワラ細工で，付票にはワラ製円形敷物とのみあるが，所用地や用途は明らかでない。しかし，ワラを太さ約 2 cm に束ね，それを幅 5 mm のワラの帯でかがったもので，そこに巻きワラ細工のひとつの手法をみることができる。タテのかけ方は，まず新しくかけるタテでヨコを束ねるとき，すでにかけられている下の段に巻いてあるタテの上の部分にとおし，その両端は1回ひねっていっしょにまとめ，新しくかけつつあるヨコの上に重ね，それを次のタテでおさえている。こうしてこの標本資料では，あるタテはヨコを1段ずつ束ね，下のタテに上のタテをからませることによって上下のヨコをつなぎとめるというやり方がなされている。タテの間隔は 2.5 cm から 3 cm となっている。このような手法は収蔵の資料ではこの標本のみにみいだされる。

例13〔収蔵原簿番号〕11522（2収—11—5—3）

口の直径 26 cm，底径 19.5 cm，高さ 14 cm の台形の巻き上げ細工の容器で，所用地等は明らかではないがこの種の器の分布からみて台湾かまたは沖縄県南部かと思われる。ヨコはヨシの葉らしいものを太さ 7 mm 前後に束ねたもので，それを幅 2 mm の竹の帯で 6 mm ほどの間隔で1段ずつ巻いてある。ヨコは巻きはじめの部分はやや細く，底は14段，胴の部分は16段となっている。この標本ではどうしたわけか口辺の一部が切断されていて，そこからタテのかけ方などを確めることができる。それによれば新しくタテをかけてゆくとき，そのタテをすでにかけてある下の段のタテにとお

し（実際には，下段のヨコの上端からわずかに下のところへとおしタテともども）巻いてゆくことがわかる。その編み方は緻密であるが，以上からこの器にもまた2段とおしかがり的な手法が用いられていることがわかる。

例14　〔品名〕食具〔標本番号〕10670（2収—1A—13—3）

口の長径34 cm・短径33 cm，底の長径33 cm・短径25 cm，高さ19 cmの楕円体形の巻き上げカゴで，材料にはタケが用いられている。所用地は台湾という。底の部分と胴の部分とでは，やや編み目の様子がちがい，底のヨコには太さ8 mmの丸竹，胴のヨコには幅9 mm，厚さ約2 mmの身竹，タテは両方とも幅6 mm，厚さ1 mmの皮竹である。材料はいずれも幅がひろく，編み方は大胆で，そのためかえって編み方をうかがうよい資料となっている。ヨコの数は胴の部分で20段，底は13段である。タテの掛け方は2段巻きの手法によるが，タテのえがく線は波形で振幅は3 cm，その上のタテは，いま巻いたタテの上段のヨコをこれと共有する形，下のタテは，いま巻いたタテの下段のヨコを共有する形，総じてタテの配置は外側からみると右上り坂道形になる。縁は胴の部分を編む最上段のヨコをのせた後，さらに幅約1 cm，厚さ5 mmの皮竹をその上にのせ，それにタテをかけ，9 cmごとに最上段のヨコをとめてゆく。あるタテから次のタテまでは，タテをちょうど組みカゴ細工の巻口仕上げと同じように，のせた縁の竹に巻いて仕上げている。ここには同じ2段巻きでも，さらにタテをこまかくいれて目のあいだをつめてゆくという手法がみられる。

例15　〔品名〕籐製雑物いれ〔標本番号〕10656（2収—1A—13—1）

直径30 cm，高さ8 cmの浅い円筒体形の巻きカゴ細工で，手法的には前の例（標本番号10670）とほとんどかわらない。ただ，この標本では編み目の密度がたかく，編み方も緻密である。ヨコには幅3 mm，厚さ2 mmの皮竹，タテには幅4 mm，厚さ約0.5 mmの皮竹が用いられている。タテは約1.5 cmの間隔で波形にかけられていて，その手法は2段巻きである。縁仕上げも原則的に前例と同じ方法によっている。なお，この標本には，台の役目をはたすものとして，幅1 cm，厚さ1 mmの身竹が，底の部分に曲物形にとりつけられている。この台輪の直径は23.5 cmほどで，底の部分への接合は幅2 mmの1本の皮竹で結びつけられている。このような台輪の形やその取りつけ方は他の標本にもその例をみることができる。ここでは国外の資料としてもうひとつだけマレーシア採集のものをあげる。

例16　〔品名〕草編皿〔標本番号〕9981（3収—2L—22—2）

口の直径23.7 cm，底径13 cm，高さ4.5 cmのたいらな皿で巻き上げ細工の手法で作られている。近年マレーシアで採集されたもので，全体として密度のきわめてた

かい編み方がなされている。ヨコは幅4mm，厚さ約3mmの皮竹らしく，底の部分も胴の部分もヨコの表の面がつねに垂直になるよう，すこしずつずらしながら積み上げられ，その反対に器の内側はまるみをもたせるようヨコの上下の角を削って（面をとって）いるようにみえる。胴はおよそ16段，底は約20段で，底の中心の巻きはじめの部分には直径8mmの穴があり，そのまわり3cmほどの範囲までは他の場所のヨコより幅がせまい厚さ1.2mmの竹が用いられている。タテは幅約2mmの薄い皮竹で，6ないし7mmの間隔で上下2段ずつ波形に巻いてゆく。そのひと巻きの様子をみると，波の上限の点は，上段のヨコとさらにその上のヨコを巻くはずのタテの下限に接し，波の下限の点は下段のヨコとその下の段のヨコとを巻くタテの上限に接するようになっていて，タテは器の外側からみると右上りの坂道形の文様を形作ることになる。縁仕上げは，タテをかけるとき，縁竹のみを束ねる場合と縁竹とその下のタケとを束ねる場合を交互にくりかえす。したがってこの器には2段巻きの手法がおこなわれていることになる。

例17　〔品名〕提籠〔標本番号〕20132〔収蔵原簿番号〕9251(2収—1H—11—2)

ヒョウタンにカゴをかぶせたもので，口径18cm，底径16cm，最大幅約26cm，高さ約28cmである。外側のカゴの目は六つ目で，タテとヨコの幅は6mmで皮竹が用いられている。ヨコの間隔は1cm，タテはヨコ上下2段をいっしょに巻くように，波形にかけてゆく。その際，波の上限は，ヨコをなかにしてその上側のタテの下限と，また波の下限はその下のヨコをなかにして下側のタテの上限と向かいあう形で編んでゆく。その様子を仮りに巻きカゴ細工の模式図で表わしてみると図1fに似た形になる。この標本では波の上限から下限へおりるとき右隣りのタテの上にかけるようにしているが，これを上ではなく下へくぐらせるようにすれば，これまでの2段巻きの手法となる。ただし，前例よりもタテが1本余計にはいり，編み目はさらに細かいものとなる。

Ⅲ．若干の考察

以上この報告では巻きカゴ細工についての一応の定義をのべ，その編み方についての用語等を規定し，それにもとづいて，国立民族学博物館所蔵の関係標本資料からとくに17例（うち2例は参考例）をえらび，分析の結果を記した。いま改めて17例を表にまとめてみると表1のようになる。

1　この表にもうかがえるように，国内の巻きカゴ細工は，おおむね，2段とおし

表1　巻　き　カ　ゴ　細　工　15　例*

例	名　称	標本番号	収蔵番号	（大きさ）直径 cm	高さ cm	採集地	材　料	編み方	備　考
1	ガイスバル	17673	5880	51.0	23.0	沖縄，八重山，黒島	（タ，ワ）	2とおし	
2	ガイシナア	17002	5147	30.0	13.5	沖縄	（タ，ワ）	2とおし	みぎさか
3	メシビツ	16399	3531	27.0	17.0	鹿児島，十島，竹島	（タ，ワ）	2とおし	みぎさか
4	シンタ	16599	4133	41.5	13.0	鹿児島，十島，硫黄島	（タ，ワ）	2とおし	みぎさか
5	ジョウゴ	18228	6491	39.0	27.0	山口，熊毛，上関	（ナ，ワ）	2とおし	ひだりさか
6	フゴ		3561	43.0	30.0	島根，簸川，大社	（ナ，ワ）	2とおし	たてじま
7	スオンキ	18713	7069	14.0	15.5	北海道，幌別，幌別	（ナ，ワ）	2とおし	
8	ナベフタ	16998	5139	28.5	10.0	沖縄	（ワ，ワ）	2まき	みぎさか
9	シンニイ	18902	7289	34.0	17.0	鹿児島，大島，喜界	（ワ，ワ）	2まき	
10	ワラブタ		50015	36.0	26.0	？	（ワ，ワ）	2まき	ひだりさか
11	イジコ		11807	64.0	35.0	？	（ワ，ワ）	2まき	
(12)	円形敷物		11608	38.5	2.0	？	（ワ，ワ）	1まき	
13	容器		11522	26.0	14.0	台湾	（タ，ワ）	2とおし	ひだりさか
14	食具	10670		34.0	19.0	台湾	（タ，タ）	2まき	みぎさか
15	雑物いれ	10656		30.0	8.0	台湾	（タ，タ）	2まき	みぎさか
16	草編皿	9981		23.7	4.5	マレーシア	（タ，タ）	2まき	みぎさか
(17)	提籠	20132	9251	26.0	28.0	？	（タ，タ）	六つ目	

* 略号
　材　料　　タ は 竹，ワ は わら，ナ は なわ
　編み方　　2とおし は 2段とおしかがり，2まき は 2段まき，1まき は 1段まき
　備考（タテの文様）　みぎさか は 右上り坂形，　ひだりさか は 左上り坂形
** 例 12，例17 は参考例

かがり，または，2段巻きの手法によってつくりだされていることがわかる。ここにもみるように，2段とおしかがりの手法は沖縄県八重山諸島にはじまり北海道幌別地方採集の標本資料にいたるまで，ほぼ全国的に見いだされる。その構成はワラなどの素材を竹やシュロ縄などによって束ねたもので，いうまでもなく，針で糸をとおして縫い物をするようにこれらの線材でワラをとおして編んでゆく点におおきな特徴があるといえよう。また，2段巻きの手法は沖縄県採集の標本資料にもみられるが，むしろ，それが全面的に開花をとげたのは東北地方そのほかのイズメ（嬰児籠，飯詰め）だったらしく，素材的には，タテにもワラが採用されている点，しかも，それをひと

巻きごとに結びとめてゆく手法が印象的である。2段とおしかがりはもとより，2段巻きも，いずれもワラなどの素材の持ち味をきわめて効果的に利用したものといえよう。

なお，その分布の状態からみて，2段巻きが2段とおしかがりの派生形（2段とおしかがりのタテ材を竹などの線形材からワラのような帯形材へ置きかえた形）ではなかろうかという想像がなりたつ。それを積極的に証明する資料は目下のところ思いつかないが，その逆は考えにくく，いずれにせよ巻きカゴ細工の使い途や作り方，巻きカゴ細工の所属する文化全体の流れなどともにらみあわせて，なお材料を蓄積していかねばならないと考える。

2　それなら国内の巻きカゴ細工が2段とおしかがりと2段巻きだけかといえばそうとはいいきれない。所載の分析例では，わずかに1例（例12）しかあげられなかったが，1段巻きの手法が巻きカゴ細工以外ではおこなわれている。この手法はタテ同志をからみあわせることによって上下段のヨコを結合してゆく手法であるが，国外の巻きカゴ細工にもその例をみることができると考えられ，その点，国内で同手法を確める余地がのこされているといえよう。台湾収集の例13では1段巻きと2段とおしかがりの中間手法が見出される。

3　2段とおしかがりの手法も2段巻きの手法も，その分布はワラ細工圏に限られるものではない。その外形はちがうけれども，この手法はともに類例を国外の巻きワラ細工にもとめることができよう。たとえば台湾採集の標本資料例13，ないしは例14，例15，マレーシアの標本資料例16がそれである。ただし，ヨコ材がワラのようにとおしやすい素材でなかった場合には2段巻きの手法が一般的な手法となる。現在東南アジア地域をはじめその外側の地域にいたるまでこの手法がひろくおこなわれている。そこで，ワラ細工の巻きカゴ細工とちがった意味で，2段とおしかがりのやり方は2段巻きや1段巻きの派生形ではなかろうかという想定がうまれる。

4　もちろん国内の2段巻きと国外のそれとでは外見も素材もおおいに異なる。国外の2段巻き（例14，例16）では何よりもタテ材は竹のような線形材で，国内のように切れぎれに続くのではなく，また器の表面全体をおおうのではなく，タテ同志がほどよい間隔をたもちつつ波形にヨコを巻いてゆく。その結果，タテの上下のなす文様は上り坂道形の文様となる。それがまた巻きカゴ細工の意匠のひとつの特徴的な形となっている。また，タテ材が竹からさらに木の皮のような帯形材になるにしたがって，タテをツイストさせたり，ヨコへの掛け方をかえたりする諸手法が生みだされている[杉浦　1940: 50-59]。国内の2段巻きと国外のそれとのあいだには，まだ解決され

ないいくつかの問題がのこされている。

5　ここに例としてとりあげた巻きカゴ細工の器の比例（直径1に対する高さの割合）を念のため調べてみると，高さが直径の2割未満のもの2例，2割から4割まで3例，4割から6割までがもっとも多く6例，6割から8割までが4例，その他10割をこえるものわずかに2例となっている。もとよりわずか17例からいうことはできないけれども，それはまた東南アジア地域から東アジア地域にかけての巻きカゴ手法が適用されている器の形のおおよそを，おのずから示してくれているように思われる。

文　献

BARRETT, S. A.
1908　*Pomo Indian Basketry.* University of California Publications in American Archaeology and Ethnology (U.C.P.A.E.) 7 (3).

BEALS, R. L. & H. HOIJER
1965　*An Introduction to Anthropology.* Macmillan Co.

DRIVER, H. E.
1961　*Indians of North America.* The University of Chicago Press.

KERRY, I. T.
1930　Yuki Basketry. U.C.P.A.E. 24 (9).

中村たかを
1966　「巻きワラ細工について」『日本民族学協会・日本人類学会第21回連合大会記事』。
1970　「藁細工の七つの手法」『民族学からみた日本』 河出書房新社，pp. 161–173。

O'NEALE, L. M.
1932　*Yurok-Karok Basket, Weavers.* U.C.P.A.E. 32 (1).

杉浦健一
1940　「籠，編物」南の会編『ニューギニア土俗品図集』 南洋興発株式会社，pp. 50–59。